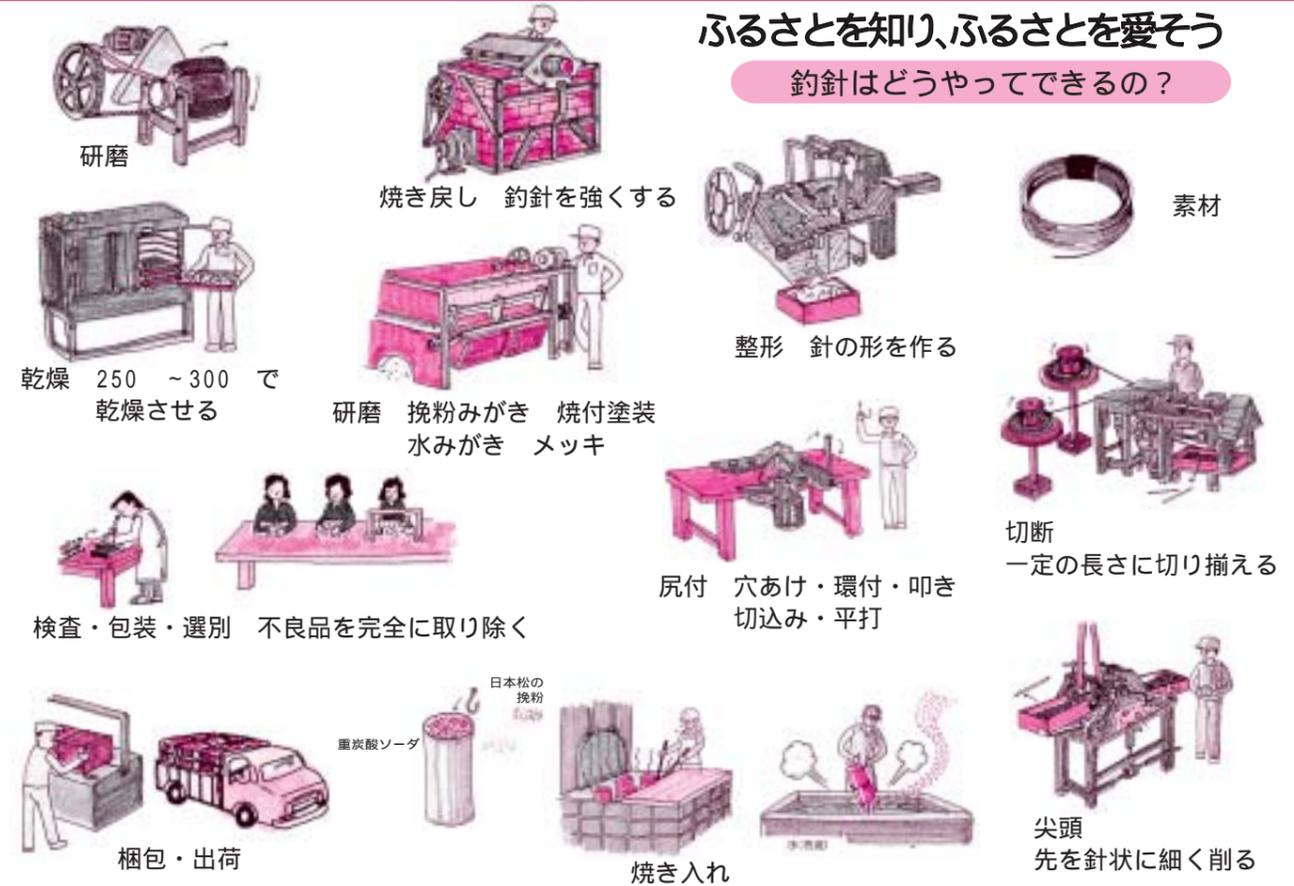


ふるさとを知り、ふるさとを愛そう

釣針はどうやってできるの？



兵庫県釣針協同組合 理事長 土肥芳郎さん



兵庫県釣針協同組合 青年部会長 岸田和也さん

当地で作る釣針が「世界一」といえる点は、その品質です。世界随一といわれる日本の鉄鋼技術で生まれた素材を使用し、日本の精巧な機械を使用し高度な技術をもって作っている点です。これらがあるからこそ、世界一の品質を持った釣針が作れるのだと思っています。

現在、物価高の影響で釣針を作る素材も大幅に値上がりしており、釣針自体も単価が上昇しています。しかし、私達はそれに見合う品質の釣針を作れるように技術力のアップ、新素材の開発などを目指しています。

また、世界を相手にするブランドを維持するには、一日たりとも立ち止まっていられないので、他にはない高付加価値のあるものを作り出し世界に供給できるように、様々な課題に取り組んでいきます。組合は今年で七十周年を迎えます。これからもこの産地を維持し、世界に向けて発信していけるようになりたいと思います。

私達の釣針業界は、世界中を視野に遊漁用から漁業用までさまざまな釣針を作っています。現在の釣針は、素材の品質向上に伴い鉄製から鋼製へと変遷してきました。私達は素材が持っている特性を最大限に引き出し、最高品質の釣針を提供しようとして研究しています。もちろん、製造方法や設備なども変わりました。日々進歩する素材で最高品質の釣針が作れるようになるまでは、各工程の加工業者において大変な苦労があります。

今いちばんの課題は、人材の育成です。先代から受け継がれた地場産業である「世界一」の釣針を後世に継承できるように、青年部が一丸となって構築しています。今後は、日本の釣針を地域ブランド「播州釣針」として世界中に発信していきます。そのためには、より一層の連携を深め、技術・品質・効率の向上を目指してがんばります。ぜひ一度、私達の組合ホームページをご覧ください。

兵庫県釣針協同組合ホームページ <http://www.hyoturi.or.jp>

彦兵衛の情熱

彦兵衛は、よりよい釣針を作るために全国を旅し、研究に研究を重ねました。明治三(一八七〇)年に七十歳でこの世を去るまで、私財を投げ打ち、生涯を釣針製造に捧げたそうです。

彼の没後、その情熱を受け継いだ弟子達が、釣針製造をさらに大きく成長させました。その最大の転機が全工程手作業という作り方を、機械化することでした。それまでの手作業による製造だと、一人で一日に製造できる量は千本程度。この作業を何とかして機械化し、量産できる道はないかと挑戦が始まりました。

念願の機械化へ

職人達は、全工程機械化を目指し工夫を重ねました。その中で、最初に機械化されたのが「イケ」と呼ばれる針先の返し部分を作る作業でした。(三ページ上段参照)

明治四十二(一九〇九)年、藤原重太郎氏がこの機械を発案。その研究に大きく貢献したのが土肥富太郎氏でした。この機械により、作業効率が大きく上がり、一人一日一万本を生産できるようになったと土肥富太郎氏が記録しています。

その後も様々な職人の手によって、釣針用尖頭機(先を削り尖らせるための機械)、形曲機(針を曲げるための機械)などが開発され、昭和十四(一九三九)年、ついに全ての工程が機械化し、生産量は大幅に増えました。

兵庫県釣針協同組合

組合は昭和十三年六月に「播州釣針釣具工業組合」として創立されました。その後、改組を繰り返して、昭和二十二年、新しい組合法のもと、現組合の前身である「播州製釣工業協同組合」が設立されました。今年、創立七十周年を迎えられます。平成十九年度の組合員数は四十二名で、加東市・小野市・三木市にある釣針製造業者で構成されています。

組合では資材の共同仕入れを軸に、環境問題や釣を通じた親子のふれあい、釣針の碑の清掃活動、物産フェアなどのイベント参加も行っています。



釣針の碑
昭和33年に作られた「釣針の碑」。年に一度、組合員のボランティアによって清掃活動が行われています。

組合では毎年11月に開催される物産フェアで、「あまご釣り大会」などを開催し、子どもから大人まで釣りファンから大人気をえています。



販売先の開拓

機械化に伴い大量生産ができるようになった釣針。しかし、実際に針を使う漁師たちは、「手作業で作った針の方が良い」という信念があり、なかなか機械製の釣針を使用してくれませんでした。

その状況を打破すべく、全国を回り漁師に無料で針を提供して実際に使ってもらい、徐々に機械で作った釣針の良さを広めていったそうです。その評価は少しずつ広がり、ようやく播州産の機械製釣針が全国に名前をとどろかせることとなりました。

目指すは世界一

釣針製造は、その後様々な時代の中で物資不足などにより大変な不況にも遭ったそうです。それでも、今の播州の地で釣針が製造されているのは、小寺彦兵衛が「焼き入れ」の技術をあきらめずに追求し釣針製造に成功したことをはじめ、職人達が機械化への道を成し遂げたことや戦時中の不況にも負けず、今日まで釣針製造を受け継いできたこの土地に住む人々の粘り強く研究熱心な人柄から生まれたものです。

そして現在、播州釣針の品質は世界一といわれています。それでも現状に満足することなく、より大きく世界へ羽ばたくことを目指して、技術力や効率のアップ、素材の開発などに積極的に取り組んでおられます。

加東の元気は、こういったみなさんの絶え間ない努力によって、生まれてくるのではないのでしょうか。

アクア東条

アクア東条は、旧東条町時代の平成元年に内水面関連知識普及教育施設として東条湖畔に建設されました。運営は兵庫県釣針協同組合が行っており、今年で開設二十周年を迎えます。

施設内には東条湖に住む魚やウールパーなどの珍しい生物が数多く泳いでいます。また、全工程手作業だった時代の作業台(非公開)や、サイズも形も様々な釣針が保存・展示されています。

市内外を問わず園児や小学生が見学に訪れ、魚や釣針について学習することもあります。

この水槽のこの水。海と一緒に泳いでいる淡水魚の鯉と、海に泳いでいる淡水魚のカクレクマノミが、謎解きに足を運んでみられては。



市内小学校のみなさんが、ふるさととの自然環境について学習に訪れました。子ども達の勉強にも、大きな役割を果たしています。